

令和6年度 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日 令和7年3月31日

法人名

園 名

みやまの森学園

みやまの森こども園

まとめ

全体平均

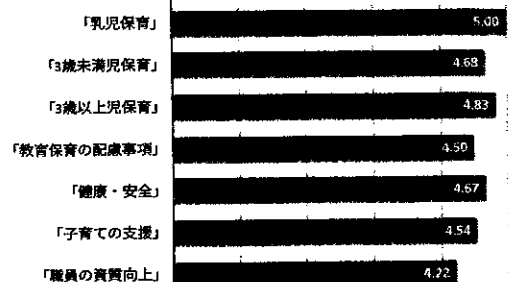
4.71

第2章第2節 乳児期の園児の保育	新入園児が園生活に慣れるまでは特定の保育者が関わりを持ち、安心して過ごせるように配慮している。こうして在園児が保育者との信頼関係を十分に構築しているということ、以後の新入園児受け入れの前提とすることで、保育者が新入園児にじっくりと関わる事ができている。温かく柔らかな雰囲気の中、環境構成の重要性を担当職員全員が共有し主体性を尊重した遊びや五感を使った遊び等を提供したことにより、身近な環境に興味・関心を持ち表情豊かに過ごすことができている。現在の人的・物的環境および職員間の連携を維持し、更なる保育力の向上に努めたい。
第2章第3節 満1歳以上満3歳未満園児の保育	保育者により一人ひとりに寄り添った応答的な関わりをなか、安心感をもって好きな絵本や音楽との出会い、園の豊富な自然環境の中で出会う昆虫や植物など、様々な興味・関心を友人と共有する時間を日常的に設けていることで、個人差はあるものの、ほとんどの子どもたちが年齢に応じた基本的生活習慣や社会性を身につけると同時に、豊かな感性を育てている。
第2章第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育	保育者自身が学びを共有し、日々に変化をもたらす、活動への意欲が持続する環境構成や活動内容の工夫をしたことや、自分たちで考える時間を十分に持ったことにより、子ども達がより伸び伸びと活動した。また、活動に没頭して遊びこむ経験や、話し合い活動で積極的に自分の意見を主張できた経験から、自信や自己肯定感を育むことができている。半面、睡眠などの生活リズムや保護者との関わりに関する課題を抱える園児は、関心が難しく、話や活動に集中できない等、発達差が見られる。クラス全体に影響を及ぼすことから、対応を検討している。
第2章第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項	全職員が、子ども一人ひとりに寄り添い、丁寧に向き合うことを心掛けている。特に担任職員間では、朝礼やミーティングを通じて、子ども一人ひとりの体調や家庭環境、発達状況を共有し、必要に応じて看護師や栄養士などの専門職と綿密に連携を図ることで、ほとんどの子ども達が、園を居場所と感じ、安心して園生活をおくることが出来ている。また、子どもだけでなく、保護者からの相談にも誠実に向き合い、支援に努めている。日によって担当クラスが変わるサポート職員との課題や情報の共有が上手くいっていない場面も見られたことから、円滑な連携策を検討し、より一人ひとりに応じた関わりを進めていきたい。
第3章 健康及び安全	健康及び安全に関しては、職員個人に任せるのではなく、食育や避難訓練などの教育面、感染症対策や備品管理などの管理面の両面で、組織的に計画・実行したことで、職員はもとより子ども達にも食事の大切さや衛生・防災意識が根付いてきている。また、保護者会協力のもと、近年の大規模自然災害発生増加傾向を踏まえた緊急時引渡し訓練を今年度も計画した。あいにく、当日台風が到来したため、「災害伝言サービス」にアクセスする訓練に変更して実施した。この訓練は、園と保護者間で、緊急時に対する様々な対応を共有するきっかけとなっており、台風による倒木や園内通路に散乱した膨大な枝葉の撤去が1日で完了し、早急な開所につながるなど、実際に成果が表れ始めている。
第4章 子育ての支援	こどもの健全な発達にとって、保護者と園・保育者との信頼関係の構築が、最も重要な要素の一つであるとの共通認識のもと、全職員が細やかな保護者対応を心掛けている。様々な事が多様化する中で保護者の捉え方に温度差を感じる場合が多いため、保護者一人ひとりの心の変化に気づけるよう寄り添った対応をしている。それによりほとんどの保護者と信頼関係を築くことが出来ている。また、入園前の見学時から園の教育理念を詳しくお伝えしていること、入園後も懇談会その他、保護者参加行事において乳幼児期の健全な発達に関する正確な情報をお知らせする機会を継続して設けることで、保護者の乳幼児期の発達に関する知識・関心も年々深まり、保護者参加行事の参加率も非常に高くなっている。また、関係機関や行政と連携し、事案が生じた場合は共有し迅速な対応を行っている。
第5章 職員の資質向上	特定の職員だけでなく、出来るだけ多くの職員が研修に参加し、課題を共有することが、園全体の教育・保育力向上につながることを考え、従来から継続する日本赤ちゃん学会や東京大学、全国認定こども園協会による学会、シンポジウム、研修などへの職員派遣に加え、先進園への視察やドキュメンテーションを用いた新たな形の園内研修などの取り組みを始めた。また、現在、世界で最も優れた幼児教育の一つとして各国が取り入れようとしているレジジョエミリアアプローチを学ぶため、園長が海外視察研修に参加する等、更なる保育力向上を見据えた取り組みにも着手した。このような取り組みにより、子ども達の姿からは、着実な発達を感じられる。また、保護者評価の結果からも本園の教育・保育に一定の評価を頂いていることから、少しずつではあるが保育力が向上していると考えている。但し、着実に力をつけている保育者と思う様な成長が見られない保育者がいる点は、改善できていない。更なる研修内容・方法の改革やキャリアパスの構築などにより、園全体の教育・保育力の底上げを図りたい。
総合	常に、子ども一人ひとりに丁寧に寄り添う意識を共有するとともに、子ども達が園での活動に不安や負担感、苦手意識を感じることなく、遊びに集中できる環境設定や関わりをすることを目指した。多くの活動で、子ども達が主体的に生き生きと活動する姿が見られ、ファインフェスタ（発表会）では、多くの保護者の方から我が子の成長を実感する声が開かれた。また、継続してきた国内外の一流研究者による質の高い研修受講に加え、先進園の視察や新たな形式での園内研修により、少しずつではあるが、園全体の保育力の底上げが見られた。保護者評価から、これらの取り組みを、ほとんどの保護者の方にもご理解頂き、協力関係が構築できていることが覗える。具体的な活動では、日常的に園の豊かな自然環境を取り入れると同時に、年度中盤からは、様々なコーナーを設け、こどもが仲間と共に、自身の興味関心に没頭できる環境を準備したことで、ほとんどのこどもが、園を自分の居場所と感じ、集団でも落ち着いて活動に参加する姿が見受けられた。半面、ごく僅かではあるが、安定して活動に取り組めない園児も見られた。また、安全管理や感染症対策を講じて、安心して園生活を送ることができる環境づくりに努めたものの、コロナ後の免疫力低下もあってか、一年を通じて感染症に罹患する園児が多数見られた。言うまでもなく、これらの課題を解決するには、担任だけでなく、当該園児に関わる全職員と保護者の協力と連携が不可欠である。一部の保護者には、園での活動の目的やこどもの発達に関する情報を正確に伝えきれていない状況があることから、各種お便りや懇談会の内容を再検討し、園と保護者との更なる円滑な連携に繋げていきたい。

データ表

内容	項目数	平均
「乳児保育」	15	5.00
「3歳未満児保育」	31	4.68
「3歳以上児保育」	47	4.83
「教育保育の配慮事項」	10	4.50
「健康・安全」	15	4.67
「子育ての支援」	13	4.54
「職員の資質向上」	9	4.22
計	140	4.71

データグラフ



令和6年度 みやまの森学童クラブ 職員自己評価

教育保育理念

学童における生活を通じて生きる力を育成するよう努め、義務教育及びその後の教育の基礎を培うとともに、保護者と共に児童を健やかに育成するものとする。

【評価 5:できている 4:ほぼできている 3:どちらともいえない 2:あまりできていない 1:できていない】

	質問内容	評価	評価
教育課程・指導	みやまの森学童クラブの教育保育目標を理解し、実践している。	4.4	「お気に入りの一冊をあなたへ」に全員で出品した。夏休みの間何度も推敲し出品したところ、今年度も団体賞を頂いた。また、個人賞にも一人入賞した。次は自分が、と次年度への意欲を燃やしている。 ビブリオバトルでは、発表資料の一つとして本の表紙を撮影する際、様々な素材を準備したことにより、背景の画用紙の色にもこだわる子が増えた。タブレットでプレゼンテーション資料を作成し、ワイヤレスマイクを用いて発表することも定着してきた。年々、事前準備の仕方を学び、工夫する姿が多く見られる。 その他の行事は計画段階で子どもたちが意見を出し、役割を持ち、高学年を中心に責任持って活動することができた。しかし、早めから計画しても直前まで準備が必要だった。今後も、子どもたちの発想を生かし、余裕を持った準備ができるよう関わっていききたい。 また、子どもたちの活動をより輝かせるためにはどうしたらいいか、研修等に積極的に参加することを通じて、最新の知見や情報を収集するなど、職員の資質向上にも努めたい。
	年間目標を理解し、計画的に実践している。	4.0	
	児童個々に応じた指導・関わりは適切である。	4.4	
	各種行事は計画に基づいて適切に準備できている。	4.2	
	職員間のチームワークや、連絡体制等、連携ができている。	4.2	
	長期休暇中は、児童のしたいことや、興味のあることを取り入れている。	4.2	
	研修・研究への意欲・態度は適切である。	3.8	
環境・安全管理	安心・安全を第一に考えて、施設内や環境整備や児童自身が安全に気をつけて行動できるように援助できている。	3.7	応急手当等は看護師に相談し適切に行った。高学年を中心に話し合いをし、事故やケガにつながらない遊び方についてルールを作ったが、小さな事故は無くなっていない。今後も話し合いを重ね、安全性が増す遊び方の工夫をする必要がある。 日頃から継続して取り組み続けたことで、秋の落ち葉時期だけでなく学童前広場の掃除を率先して行う児童が増えた。排水溝の掃除も定期的に行い、降雨時に備えることができている。安全で快適な環境について児童自身が考えて行動できるようになりつつある。 委員会を発足し、活動や行事に合わせて子どもたちと掲示物を作って展示はしたが、継続する工夫と声かけが必要である。
	子どもたちの思いや言動を参考にしながら、室内の装飾や展示を考えている。	3.5	
	体調不良児への対応や、投棄の流れ、ルールの把握と実行には配慮して対応することが出来ている。	4.2	
	緊急時(事故・感染症の発生時など)の対応などの体制が整備されている。	4.2	
子どもとの接し方	その場にふさわしい言葉遣いや、すべての子どもに平等に接している。	4.0	一人ひとりの個性にあわせた言葉かけをし、信頼関係を築くことが出来ている。個々の学習習熟度が異なり学童時間内だけでは不十分であることを引き続き保護者と共有したが、まだ安易に考えられているご家庭が多い。班活動では、班長を中心に良い行動の仕方を考えることはできたが、高学年ほど欠席する日が多く、低学年のうちから継続してリーダーを育成する重要性をより感じた。
	家庭での様子や発達の個人差を考慮し、子どもの思いを大切に援助を工夫している。	4.0	
	児童が主体的・協同的に班活動や行事を行い、学年相応の社会性を、修得できるようにしている。	3.8	
との連携	保護者への情報の発信と受信は適切である。	4.3	学年別の茶話会では、時間が足りずもっと話したい様子だった。保護者の関心事がわかり、家庭での様々な姿を知る機会ともなった。学童日より、掲示板の活用等、日常的なコミュニケーションに加え、個人面談も継続して行い、保護者と良好な連携体制を構築している。保護者からの質問や相談は随時受け付け、対応して解決している。学童側からも、気になる点は保護者へ伝え、記録に残し、職員間でも共有している。
	学童だよりの内容や配布頻度、時期は適切である。	4.2	
	学童クラブ全体で協力、支援体制ができ、保護者対応は適切である。	4.0	
食事の提供	献立は、旬の食材を使い、バランスの良い給食を心掛けている。	4.2	旬の地域野菜を仕入れ、自家農園の野菜を使用する等、安全な食材を使用し、栄養士が作成したバランスの良いメニューや手作りおやつを提供している。また、アレルギーや矯正などの情報を保護者と共有し、一人ひとりの状況に合わせた対応をしている。このような取り組みによって、学童での食事の時間を楽しみにし、身体的成長の一助となるなど、心と体に良い影響を及ぼしている。 食事・おやつ前後の消毒作業の徹底や、下校時刻に応じたおやつ時間の分散等を続けているため、学童内での感染症の感染拡大は起こっていない。
	みやまの森の畑で収穫した野菜を工夫しながら給食に取り入れている。	4.4	
	アレルギー対応児の食事提供は、問題なかった。	4.4	
	担当者間のチームワークで、子どもたちに喜ばれる食事・おやつ時間の提供に努めた。	4.0	
	衛生面の徹底に努めた。	4.2	
その他	地域住民やこども園の園児・保護者も、親しみやすい雰囲気づくりを大切に行っている。	4.2	学童が所有する森や広場など自然環境を活かし、幼小連携を念頭に、こども園園児との合同の行事を実施した。児童への支援はもちろん、保護者や外来者に対しても誠実な対応を心掛けてきたが、真意が伝わらなかったり、個別の対応の仕方に個人差を感じさせる結果となったりし、ご意見を頂くこともあった。今後は、支援員の連携をさらに図り、すべての保護者に必要なかわりができるようにしたい。 小学校の情報交換会等に出席し、校区内の各種団体との情報交換を行っている。学校へも可能な限り足を運んだ。こちらからは情報を得ようと努力しているが、連携という点では小学校側との意識の乖離を感じている。
	地域への情報発信や交流・連携は積極的に行われている。	3.0	
	遅刻等ないように就業規則を理解し、誠意をもって業務遂行にあたっている。	4.7	
	健康面等、自己管理に気を付けている。	4.0	
	挨拶・電話対応等外部への対応は適切に行っている。	4.2	